

ドイツ教育史叙述断章

山内 芳文*

1. ラウマーとその『教育思想史』について

カルル・フォン・ラウマー (Karl von Raumer, 1783. 4. 9-1865. 6. 2) の名は、唯一それによってその名を後代に留めている『教育思想史』 (*Geschichte der Pädagogik, vom Wiederaufblühen klassischer Studien bis auf unsere Zeit*, 1842) がドイツにおいてはじめて出現した本格的な教育史書 (これ以前には、1830年代に、クラマー Cramer による古代の教育史 *Geschichte der Erziehung und des Unterrichts im Alterthum* とオランダを中心とした中世の低地ドイツ教育史を扱った *Geschichte der Erziehung und des Unterrichts in den Niederlanden* がある) であるにもかかわらず、現在においては一部の教育史研究者以外には、その名さえ知られていない。しかも、そのさいのラウマーは、『世界図会』の考案者としてのみ伝承されてきたコメニウスの『大教授学』の再発見者として、そしておそらく初めてペスタロッチの教育実践と教育思想を詳細に整理し、『隠者の夕暮』にペスタロッチ教育学の真髄をみたことによって注目されるべきだが、梅根悟の『隠者の夕暮』の邦訳に付された多くの精緻な文献考証を示す事例のひとつにみられるなど、これはごく一部の教育史家によって触れられてきたにすぎない。そして、ラウマーの『教育思想史』においては、明らかに、コメニウスからペスタロッチへの、しかもその神秘主義的なみちすじが叙述の基軸となっている。

ところで、現生における学知の獲得が来生における人類の幸福をもたらすというコメニウスの教育思想の確信的な根幹は、明らかに啓蒙主義の教育思想に重なり合っている。この点で、コメニウスには、たしかに啓蒙主義者といえなくもない側面がある。しかしながら、そのコメニウスを啓蒙主義の教育家たちは完全に

* 教育学専攻 教授

とってよいほどに無視してきた。コメニウスの啓蒙主義的な傾向に着目されるのはかなり後になってからのこと、極端ないいかたをすれば、西欧の教育思想家がその「近代」性に関心をもつようになる20世紀の後半になってからのことだ。さらに、その「神秘主義」的な傾向に主要な関心がむけられるようになるのは、ごく最近になってからのことで、その理由を詮索すること自体かなり困難だが、ルネサンスの神秘主義的な進歩主義からのデカルトの合理主義による偏位において、啓蒙主義の成立が一方的に確認されるとすれば、そのような事情はある程度の推測を得ることになるかもしれない。そのような成立は、イギリス近代科学思想史の劈頭を飾るはずのフランシス・ベーコンからの系譜をカッコに括って、あえてロックにおいて確認される。ドイツの啓蒙主義は、ベーコンやコメニウスなどに濃厚に漂う錬金術的な神秘主義を脱色させたロックやフランスの啓蒙主義者たちの系譜において、さらにそのすぐれて教育的（pädagogisch）な地歩を確保してきたとってよい。

『教育思想史』の第一部で展開されている叙述の構成からは、明らかにそのようなドイツ啓蒙主義の主流的な傾向に対抗している著者ラウマーの意図が見て取れる。Ⅰで「中世」の教育について導入的に触れたあと、それはルネサンスから本格的な叙述を開始する。「ダンテの生誕からペトラルカとボッカチオの死までのイタリア」という章題のもとに、この3人の教育思想を扱ったⅡがこれに続く。Ⅲは「ペトラルカとボッカチオの死からレオ10世までのイタリアにおける古典的な人間形成論の発展」、Ⅳは「レオ10世とその時代～光と影～」、Ⅴでは「イタリア（ルネサンス）の結末とドイツへの移行」の題目で「1340年から1483年まで、つまりゲルハルドゥス・マグヌスからルターまでのドイツとオランダ」が扱われる。第二部までを見通すならば、このⅤこそが本来のⅠになるべきなのだった。Ⅴは、具体的には、その第1節で、ヒエロニムスの系譜にある人文主義者、さらにヨハン・ヴェッセル、ルドルフ・アグリコラ、アレクザンダー・ヘギウス、ルドルフ・フォン・ランゲらに続いてエラスムスに至る人文主義者の系列が取り上げられている。ルターに至るまでにはヴィンプフェリンクやロイヒリンといったわれわれの教育史にとっても馴染みの人物が登場して、第2節は「宗教改革・イエズス会・リアリズム」として、ルター、メランヒトン、トロッツェンドルフ、

ミカエル・ネアンダー、ヒエロニムス・ヴォルフ、ヨハネス・シュトゥルム、そしてフランシス・ベーコンとモンテーニュ。そのあいだに、つまり、シュトゥルムとベーコンのあいだに、ザクセンとヴェルテンベルクの改革者たち、イエズス会、大学と学校の関係、ヴァーバル（言語）・リアリズムといった項目が挿入的に配置されている。

ラウマーの『教育思想史』は、それ自体、あとで言及するように、カトリックのバイエルン公国をパトロンとするエアランゲン(Erlangen、ニュルンベルクの北にある大学町)の大学(現在はエアランゲン・ニュルンベルク大学となっている)での講義が主体となっていることを考えるならば、イエズス会への言及にはかなり宗派的な配慮が働いていると考えられるとはしても、ルターをその構成の中心に据え、その軸をルネサンスからルターへと設定していることは、きわめて特徴的であるといつてよい。その事実をどのように理解したらよいのか。「古典学芸の復興から現代まで」という限定的な副題の含意の推定を意味するその問いは、さしあたり初版(1842年)の緒言に求められよう。その冒頭で、ラウマーは、「この書物は、1822年にハレで、その後の1838年から1842年までエアランゲンで教育思想史(Geschichte der Pädagogik)について講義したものをまとめた」といって、この著述の素材となっている講義の動機を、つぎのように語っている。「31年にも及ぶ教師生活で、単に私にとって教えるべき内容だけでなく、教える技法そのものについても次第に興味をもつようになってきた。そしてその興味が募れば募るほど、継続した講壇の講義ではなく、むしろ談論のかたちをとって、それを教えるようになった」。そして、そのとりまとめがルネサンスをもって始められていることについては、「なによりも、ドイツに注目したからだ」であり、聖母子の画家ラファエロのパトロンとしてルネサンスの絶頂にあり、同時にその栄華を維持するためにドイツでの贖宥状販売を認め、さらにルターへの対抗から神聖ローマ(ドイツ)帝国のカール5世と政略的に結んだメディチ家出身のローマ教皇レオ10世に終わる序章に導入されて、ルネサンスからドイツへの教育理念の人格的な継起は「ルターとメラニトン」において示される、というのである。ルネサンスの終焉ではなく、発展の延長上に宗教改革を位置づける教育史叙述は、今日においてもはなはだユニークなものだといつてよい。

ラウマーの『教育思想史』の終点は、その第二部の終章「ベーコンの死よりペスタロッチまで」のペスタロッチに関する叙述に置かれている。ラトケの28ページ、コメニウスの43ページに比して、ただふたりだけの非ドイツ人であるロックとルソーには、それぞれ10ページと49ページ、そして汎愛派にはまとめて40ページが当てられているが、ペスタロッチには93ページといったおおきなスペースが割り当てられている。ロックや汎愛派の啓蒙主義への目配りは最小限に抑えられ、コメニウス、ルソー、それにことにペスタロッチへの強い思い入れが、目次の構成においてもにじみでている。ただし、ルソーは、この場合、明らかに、ロックの継起として、コメニウスからペスタロッチへの系譜にとって否定的な媒介の位置にある。ラウマーの教育思想史は、こうして、コメニウスからペスタロッチへのみちがその主流的な系譜として構想されることになる。

『教育思想史』の序文で、ラウマーは、こうしなくては教育の実際から教育理念の思想史は構成されないとして、つぎのようにいつている。「歴史の書き手には、客観的な叙述、ことにその対象への愛や憎しみから自由である叙述が要求される。敵の善に盲目であってはならず、また友の悪を隠蔽するものであってもならない真実と公正が正しく求められる。しかしながら、私はそのような愛や憎しみから自由ではなく、またそうであるとするつもりもない。私は最良の知恵と良心にしたがって悪を憎み、善に与する」。当代のドイツではランケ (v. Ranke) の歴史学が絶頂期をむかえ、ラウマーの教育史が刊行された1842年は、その3年まえから5年後までの8年間に『宗教改革史』など10冊の大著が刊行されている。ラウマーのこの発言は、明らかに、ランケの歴史主義 (bloß zu zeigen, wie es eigentlich gewesen sei.) を意識し、そしてそれに反発している。ラウマーにとっては、その時代時代が神の摂理によって動かされているなどという、その機械主義が容認できなかった。「歴史家は読者に何らかの誠実さを学ぶ機会をもっている」。

バゼドウの汎愛学舎で有名なデッサウ (Dessau) の近郊ヴェルリッツ (Wörlitz) の土地貴族でデッサウの宮廷顧問官を父にもち、ベルリンやゲッチンゲンで法律を学



Karl von Ranke
1771-1849

んでいたラウマーが心機一転して鉱物学の研究を志してフライブルク (Freiburg im Breisgau) を経てナポレオン支配下のパリに滞在していたとき (1807年から1808年にかけて)、活字となったばかりのフィヒテの講演集『ドイツ国民に告ぐ』を読み、そのなかでのペスタロッチに強い関心を抱き、ペスタロッチのもとで教師になろうと、婚約者リークヒェン・ライヒャルト (Riekchen Reichert) の8才になる弟のフリッツ (Fritz Reichert) をともなって1809年の11月イヴェルドン (Yverdon) に彼を訪ねたときのことは、ラウマー自身、死の翌年刊行された『自伝』 (*Karl von Raumers Leben von ihm selbst erzählt*, 1866) で、こう語っている。「われわれが赤い色の家に投宿したのは、冷たい雨の降る夕方だった。翌日にわれわれは、かつてカルル豪胆王が創建した古城のなかに入った。その城内は4本の円柱のような塔によって囲まれていた。そこには、たくさんの少年たちがいた。ペスタロッチのところ案内されたが、彼はおよそだらしない服装で、古びた灰色の上着、ヴェストはなく、短いズボンで、靴まで垂れ下がった靴下をいていた。硬く黒い髪はもじゃもじゃで、およそ櫛など通したこともなく、きたならしかった。額に深い皺を寄せ、暗褐色の目はある時には穏やかで優しく、またあるときには火を噴き出すようでもあった」。

ラウマーによると、当時のイヴェルドンには、城内に6才から17才までの生徒が137名、市内にも28名の生徒がいて、彼らは昼になると城内に食事にやってくる。合計165名のうち、スイスの生徒は78名、ほかにドイツ、フランス、ロシア、イタリア、スペイン、そして北アメリカから生徒がやってきていた。城内には15名の教師がいて、そのうち9名がスイス人だった。ほかにペスタロッチの方法 (メトーデ) を学ぶ32名の大人がいた。結論からいえば、この半年のイヴェルドン滞在は、ラウマーにとっては、「幻滅、あるいは失望 (enttäuscht)」だった。「働こうと思っても、あまりにも多くの少年たちの喧噪の真っ只中の立ち机ひとつという状況だった。どの教師も居室などなかった。それでも、私は許婚の弟フリッツを連れて、彼をこの施設に預けた。私の境遇は、これまでの施設についてのレポート (『シュタンツ便り』や『ゲルトルート児童教授法』) のことを指す：引用者) と現に私が見たり経験したりしたことを対照させるのに十分だった。そのようなレポートによって、ことにその確立しつつあった「方法」(メトーデ) の習

得への期待が高まっていればいるほど、(そのような機械的で画一的な教授法の展開に:引用者) しだいに失望させられるのだった」。そして、ラウマーは、イヴェルドンでのそのような苦悩については、教師たちのあいだでの深刻な確執を背景に、ペスタロッチ自身も後年『わが宿命』(*Meine Lebensschicksale*) で告白している、といている。また、この事情についてはハインリヒ・モルフ (Morf) の『ペスタロッチ伝』(*Zur Biographie Johann Heinrich Pestalozzis*, 1885)によると、ラウマーの失望の原因は、許嫁の弟フリッツにあったという。裕福な家庭で母の膝しか知らず、ひとに奉仕されても、ひとに奉仕することなど思いもよらない少年フリッツには、その集団に馴染むのには年齢的にもう過ぎた。ラウマーにとっても、『隠者の夕暮』の親と子の親密な世界など、ここでは想像さえもできない状態だった。この時期のペスタロッチは、『隠者の夕暮』はもちろん、さらには『シュタンツ便り』の世界からもシフトして、まさに集団の教育、すなわち学校教育こそが、教授の一般的な理論を提供する唯一の基盤となっていた。こうして、『教育思想史』におけるペスタロッチについては、「失望」したペスタロッチの実践への明らかな反発として、『隠者の夕暮』の原文、といってもイヴェルドン時代に知り合ったペスタロッチの助教のひとりニーデラーによって改変されたもの、後にニーデラー版とよばれることになるテキストが転載されている。『隠者の夕暮』は、覚醒主義運動の神秘主義に傾倒していたラウマーにとって、実際の実践の猥雑さへの失望とは対照的に、顧みれば自分のペスタロッチへの信頼の原点を結果的に示していた、まさに神聖な一書となってしまっていたのだろう。

バゼドウの汎愛学舎で有名なデッサウに幼少年期をおくったラウマーがフィヒテを通して汎愛主義とはまったく趣きを異にするペスタロッチに心酔したものの、その事業の猥雑さに失望してペスタロッチのもとを去って、シュレジエンの中心都市ブレスラウで鉱山技師と当地の大学の鉱物学の教授として落ち着くまでには、1年ほどの期間があった。ヨーロッパ各地の山脈の形成についての比較が彼の研究テーマだったが、その時点から神秘的で夢想的な考え方が彼をとらえるようになる。やがて、解放戦争やブルシェンシャフトの運動にもかわりをもつ。ペスタロッチが没した1827年、バイエルン公国のエアランゲン大学に博物学と鉱物学の教授として赴任する。大学に職を得るまえに一時関わりをもったニュ

ルンベルクの貧民児童のための学校を發展させ、1849年には、ラウエス・ハウスの始祖であるヴィヒェルン（Wichern）のエアランゲン来訪を機に、エアランゲンの同僚とともに当地に貧民児童救済学校を設立している。このようなラウマーの幸運ともいってよい生涯には、かなり裕福な土地貴族の家系に属することによる資産と縁故の影響が確実に投影されている。そのようなラウマーの教育実践を貫く方向性は、明らかにルネサンス、そしてコメニウスからの覚醒主義そのもので、自然主義者ルソーの確信的な拒絶と三月革命の寵児ディースターヴェーク（Diesterweg）へのあからさまな敵対とによって定式化されていた。結果的に主著となった『教育思想史』は、その端緒において、その傾向を明確に示している。現代の私たちは、啓蒙主義に明確に背を向けたこの「保守主義者」のなかに、多くのその方面の著作において示される神秘主義的な鉱物学への関心においてフレーベルを連想し、また『シュタンツ便り』や『ゲルトルート児童教育法』にその理想型をみて、貧民児童の学校経営にかろうじてペスタロッチとのつながりを見て取ることができる。

ラウマーは、1865年の夏のはじめ、エアランゲンで、82年の生涯を閉じている。

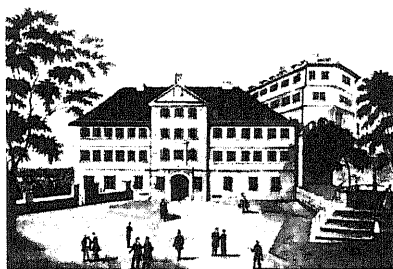
2. シュミットとその『教育制度事典』と『教育史』について

ドイツにおける事典の刊行は、グリムのドイツ語事典をめぐる旧東西両ドイツ間の協力のエピソードを引き合いに出すまでもなく、かねてより出版界の重点事業とされてきている。教育学関連の事典でも、ドイツは豊かな歴史と伝統をもっている。最近でも『教育学の歴史事典』（D. Benner & J. Oelkers (Hrsg.), *Historisches Wörterbuch der Pädagogik*, 2004）が現代のドイツ語圏の現役教育学者の結集のもとに刊行された。用語の選択がトレンドに添ったものである一方、時代区分や扱われる思想家については、依然として伝統的な枠組みや選択の域を越えることが困難のようにもみえる。

ところで、そのようなドイツの教育事典づくりの豊かな伝統はいつごろにまで遡るのだろうか。そのなかでも比較的初期の部類に属するシュミット（K.A. Schmid, 1804. 1. 19-1887. 5. 23）の『教育制度事典』（*Encyklopädie des gesamten Erziehungs- und Unterrichtswesens*）が注目される。シュミットについては、この

『教育制度事典』全11巻の編集者、それに晩年多くの協力者を得て完成された『教育史』(Geschichte der Erziehung, 1884-)全5巻10分冊の編著者という以外にあまりよく知られていないが、『一般ドイツ教員新聞』(Allgemeine Lehrerzeitung)というドイツ教員会議の機関紙の1904年8月28日発行の日曜紙面の冒頭に掲載されたシュミットの生誕100年を記念する記事でブラウンシュバイクの視学官オPPERマン (Oppermann) がシュミットについて大まかに紹介してくれている。

それによると、シュミットはそのオPPERマンの記事から100年前の1804年の1月、西南ドイツのヴュルテンベルク (Württemberg) 王国最東端の都市ウルム (Ulm) の南西にある小さな町エビゲン (Ebingen) に当地の説教師でありラテン語学校の教頭でもある父の子として生まれた。身体が弱かったこともあり、13歳までは両親の許で父の職場である教会やその周辺の野外での教育をうけ、その後をはじめてウルムの西にあるブラウボイレ (Blaubeuren) の福音派神学校 (evangelisch-theologisches Seminar) で4年間、さらにヴュルテンベルク王国域内唯一の大学があったチュービンゲン (Tübingen) のシュティフト (evangelisches Stift) に入寮する。このシュティフトは、給費生として主として当地の大学の神学部に通うエリート学生の寮で、領邦教会の牧師という将来の精神的指導者のための勉強支援施設だった。かつて、ヘーゲルやシェリング、そして薄倅の詩人ヘルダーリンなどが在籍していたことはよく知られている。このシュティフトで彼が勤しんだのは、もちろん学科の勉強だったが、とくに力を注いだのは、神学生のイメージからはほど遠い身体の鍛錬と唱歌の練習だった。しかしながら、このような寮生の日常は当時においても格別特異なものではなく、かつここに学んだ多くの人々の思い出の「健全な身体における健全な精神」(mens sana in corpore sano) がここでのモットーだったことを一様に記している。21歳でシュミットは王都シュトゥットガルトの北の村ベージハイム (Besigheim) に説教師として赴任する。父親と同じ道に進んだことになる。その勤務は週40時間とかなり厳しいものだったが、この時期に生涯の伴侶を得、彼らはや



がて12人もの子どもに恵まれることになる。1829年に、シュミットは、いまではシュトゥットガルトの東の郊外となっているゲッピンゲンの説教師兼副牧師長に任じられた。やがてそこを拠点として多忙な勤務の合間をぬって、ラインラント、ハノーファー、ザクセン、さらにはバイエルンへと出かけ、主としてギムナジウムの教育実践について調べ歩いた。ゲッピンゲンの学校は、1838年にニータンマー (Niethammer) との「陶冶論争」で有名なバイエルンの教育家ティールシュ (Tiersch) が著した『現今公教育の状況』 (*Über den gegenwärtigen Zustand des öffentlichen Unterrichts*) においてきわめて卓越したものと評価されているが、シュミットはその年にこれもシュトゥットガルト近郊の町エスリンゲン (Esslingen) のペダゴギウムの校長となり、下級、つまり基礎課程だけだった学校に古典語のコースを設け、その教授法、ことにギリシア語教授法の改善についていくつかの論文を著している。1852年からはウルムのギムナジウムの校長となるが、ここではヴュルテンベルク王国政府の意向をうけて、ことに体育の授業に力を入れたことが知られている。

このウルムの時代に、たぶんゴータの出版社ベッサー (Rudolf Besser) からシュトゥットガルトの支店を通して、アルファベット順に項目を立てた『教育制度事典』の編集の依頼が直接シュミットのもとに舞い込んだものと思われる。シュミットはこの計画を引き受け、編集協力者や執筆者を得るために精力的に南ドイツ、中央ドイツ、さらには北ドイツの町々を訪れた。このとき出会った人々は、確定した事典の執筆者一覧から推測するしかないが、それは大学の教師だけではなく、ギムナジウムの校長や教師、そして教育行政官など、きわめて多彩で多様な顔ぶれだった。編集の主たる協力者にはチュービンゲンのパルマー、ビルダームートの両教授が依頼され、彼らは同時にいくつかの項目の担当もしている。そのほかには、ライプツヒの教授 G. バウル、コブレンツの視学官 W. バウル、ブロンベルク (ポーゼン) のギムナジウム校長ラインハルト、ヴィースバーデンの視学官フィルンハーバー、マールブルクの教授ランゲ、ベルリンの教授フラスハール、さらにハレの大学監督官シュラーダー (Schrader)、ベルリンの枢密顧問官シュナイダー、ポツダムのヴィーゼ (Wiese) などが協力者兼執筆者に名を連ねていた。このなかで、定版の『ハレ大学史』で有名なシュラーダー、プロイセン

の中・高等教育資料集の編纂で有名なヴィーゼの両博士の協力が注目される。シュラーダーは「ヘーゲル」や「フィヒテ」などの小項目を、ヴィーゼは「(ギムナジウムの) 卒業試験」(Matüritätsprüfung) を担当している。シュミット自身も、「作文」(Composition, Bd.1, S.830-38)、「就学強制」(Schulzwang, Bd.8, S.381-99)、「就学前教育」(Vorschule, Bd.10, S.192-95) などの小項目を担当し、その含蓄の一端を披露している。

『教育制度事典』第1巻は1859年に刊行され、最終の11巻が刊行されたのは1878年のことであるから、完結には実に20年近くの歳月を費やしたことになる。シュミットはこのときすでにシュトゥットガルトのギムナジウムの校長に転じていた。この前後、つまり1871年から1877年にかけて民衆学校の目的や運営についてまとめた2巻のハンドブック (*Pädagogisches Handbuch für Schule und Haus*) の編集にも携わっていた。これは1883年から1885年にかけてライプチヒのフース (Fues) 書店から刊行される。また、やがてゴータのベッサー書店からあらためて『教育制度事典』の第二版が刊行され始めるのは、初版が完結する以前の1876年のことだが、その第二版の刊行が完結した1887年の夏のはじめ、シュミットは84歳で世を去っている。

シュミットの事典の最大の特色は、次節3. で触れるエックシュタイン担当の「ラテン語教育」(Lateinischer Unterricht, Bd.11, S. 483-696) がそうであるように、一項目がときにはちょっとした書物一冊分となるほどの分量を占めているということである。さらに、その内容は、たとえば「民衆学校」(Volksschule) を事例にとると、いくつかの領邦(州)、場合によっては郡・県レベルまでと、その叙述を詳細にしている。しかも、そこに籠められた歴史への目配りは「制度史事典」とさえいってもよいほどの最低限の的確さを備えている。いずれにしても、『教育制度事典』は、のちにこれもひとつの画期的な出版となるヘルバルト派の殿將と称されている W. ライン (Rein) の編集による『教育百科事典』(*Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik*, 1895) 全7巻の出現までは、ドイツにおけるほとんど唯一の教育関係事典なのだった。ラインはシュミットの事典には関わりをもつてはなかったが、ちなみにヘルバルト派の先輩であるチラー (Ziller) は、「わがまま」(Eigensinn, Bd.2, S.61-5)、「教育施設」(Erziehungsanstalten, Bd.2, S.275-82)、

「教育術」(Erziehungskunst, Bd.2, S.282-3)の比較的小さな3つの項目を担当している。

『教育史』についても補足しておこう。これもシュミットを編著者とする共同作業の集大成である。分担執筆者は『教育制度事典』の事項担当者とかなり重複している。この大部の教育史書の「序論」で、シュミットは、こういつている。「歴史の叙述は事実をできる限りその実際の連関において表現するという課題をもっている。そのうえで、相対立するふたつのみちの間の中心を動かなくてはならない。そのみちのひとつは、その内面的な連関に配慮することなしに、個々のできごとの時系列的に整理された外面的な並列状態に、もうひとつは、適当と考えない場合に、その事実の存在を無視し、あるいは適当となるよう調整するといった意図的な歴史構成に、序列をつけることである。もちろん、前者よりも後者のほうが多いことはたしかだが、教育史の文献もその両者の迷いからの事例を提供しており、したがって人間の精神は、そのようなばらばらにされた連関のなかで、自らの必要性を見いださなければならない」。シュミットのこの迷いは、この「序論」が前節でも触れたランケの命題の復唱から始まり、それへの疑問と反発は明らかに隆盛をきわめつつあった新カント派の歴史学観(リッケルトのいう「個性記述的」idiographischな学問)を意識していたと思われる。そのようなジレンマの解決は、「教育史の主要な部分の叙述にあたっては、・・・個々の事実の連関と基本の探求がなおざりにされてはならないということ、そして神の理性が人間存在のすべてを十分にお見通しになっておられるということをけって侮ってはならないということに心を用いなければならない」ということに求められる。しかしながら、ランケ的方法的な態度を受け継ぐ新カント派の歴史主義に反発するシュミットがそこまで考えていたかどうかはわからないが、その時代時代が神の祝福をうけているというのはいうまでもなくランケの歴史学の深奥に宿る信仰であり、それは教育を究極的には神のみわざと考える敬虔主義者のシュミットにも同意できていたはずだ。

シュミットの『教育史』をおおざっぱにみってみる(カッコ内は勤務地ないしは居住地)と、すべてシュミット自身が執筆する第1巻では、「序論」に続いて、自然民族、そして中国・インド・ペルシア・セム(アッシリア)・エジプトが文化民

族として前史を構成し、古典民族の教育史としてギリシアとローマが、そしてさらに予備啓示の民族としてのイスラエルが扱われている。第2巻の1は、グスタフ・バウル (Baur ライプチヒ) によるユダヤや古代世界との関係におけるキリスト教の教育、ヘルマン・マシウス (Masius ライプチヒ) による中世の教育、ケンメル (Kaemmel ライプチヒ) による中世の大学、バウルによるユダヤとイスラムの教育。第2巻の2は、ハルトフェルダー (3.で後出) による人文主義の時代の教育と教授、エルンスト・グンデルト (Gundert エスリンゲン) による宗教改革、ゲオルク・シュミット (Schmid サンクトペテルスベルク) による16世紀におけるプロテスタント派の4人の偉大な校長とその学校となっている。第3巻の1は、ゲオルク・ミュラー (Müller ドレスデン) による17世紀のイエズス会の教育と教授、エルンスト・フォン・ザルヴェルク (3.で後出)、ゲオルク・シュミットによる16世紀のイギリス教育制度となっている。第3巻の2は、アウグスト・イズラエル (Israel チョッパウ) によるラトケ、ゲオルク・シュミットとユリウス・ブリューゲル (Brügel ナゴルト) によるコメニウスとその先行者たち (アルステッドとアンドレー) 。第4巻の1は、ユリウス・ブリューゲルによる30年戦争期のドイツにおける教育努力 (ゴータの学校改革、ゼッケンドルフ、ディルヘル、モシャーロート、シュップ)、カルル・シュミット自身とゲオルク・シュミットによる敬虔主義 (その教育思想と学校)、ゲオルク・シュミットによるロック、フォン・ザルヴェルクによる17、18世紀フランスの教育と教育制度。第4巻の2は、汎愛派 (バゼドウとデッサウの汎愛学院を中心に、ヴォルケ、バルト、ザルツマン、カンペ、トラップ、ヴィヨーム)、それに他の啓蒙主義の担い手 (ロヒョウ、モーゼス・メンデルスゾーン、ペスタロッチ、シュライエルマッヘル、ヘルバルト) が総動員態勢 (新たに加わっているのは、ウーラッハのアイトレ Eitle のみ) で執筆されている。第5巻の1は、ベンダー (Bender ウルム) 宗教改革以来のドイツの教養学校 (Gelehrtenschule) の歴史とゲオルク・シュミットによる近代的なギムナジウムの歴史。第5巻の2は、ルドルフ・ホフマン (Hoffmann プラウエン・ドレスデン) によるドイツ実科学校史、ザルヴェルクによる1789年から1899年までのフランス中等教育史、19世紀イギリスの中等教育制度、それにイエズス会の教育制度、ヴュヒグラム (Wychgram ベルリン) によるドイツ

とフランスの女子教育史、ハマム(Hamann ベルリン)によるイギリス女子教育史。第5巻の3は、ザンダー(Sander ブレーメン)によるドイツ民衆学校の歴史、ホルツミュラー(Holzmüller ハーゲン)による技術教育制度の歴史、コップ(Kopp シュトゥットガルト)による視聴覚障害児教育制度史、幼児教育制度史、そして視覚障害児教育制度史となっている。

この大部で壮大な教育史の大系は、おなじように一人の卓越した指導者のもとに結集したグループによる教育史書としては、世界的にみて、本邦の『世界教育史大系』(梅根 悟監修 全40巻、1972年以降)の出現までは、完全に比類のないものだった。蛇足となるが、シュミットの『教育史』の特徴を挙げておくと、制度史においてはドイツだけでなくフランスやイギリスにまで目配りがされているが、教育家、ことにその思想家については、そのような配慮がまったくない。かろうじてドイツ語圏ということで扱われるペスタロッチについても、シュライエルマッヘル、ヘルバルトとともに汎愛派の後塵を拝するような位置付けしか与えられていないことに容易に気がつく。

3. ケールバッハとその『モヌメンタ』と『ヘルバルト全集』について

カルル・ケールバッハ(Karl Kehrbach, 1846. 8. 22-1905. 10. 21)という人物は、教育学や教育史の世界でもごくごく一部でしか知られていない。もちろん、彼の名はどのような人名辞典にも載っていない。教育史のごく限られた専門家のあいだでも、Monumenta Germaniae Paedagogica(とりあえず『ドイツ教育学の記念物』とでも訳すしかない。以下、MGPと記す)という60巻を超える膨大な教育史叢書の企画者で編集者、そして浩瀚で精緻な定本ヘルバルト全集(J.F. Herbart Sämtliche Werke)全19巻の編集者としてしか、いまのところ知られていない。ここでも、没後の回想記事やイエナに残されている簡略な履歴などから、その生涯をたどるしか術はない。

ケールバッハは1846年の夏、やがてイエナやハレといった古い大学町を貫流するザーレ(Saale)川の



Karl Kehrbach

上流に流れ込むオルラ (Orla) 川の畔、チューリンゲンの森の北辺の小さな町ノイシュタット (Neustadt) に生まれた。ワイマールの師範学校 (Lehrerseminar) に通い、1872年から郷里に近いゲラ (Gera) で市民学校の教師やザクセンの大都市ライプツヒの実科学校教師を勤め、1874年の夏学期のはじめ (4月) からはヘルバルト派の教育学者チラーが主宰するライプツヒ大学の教育学ゼミナール (pädagogisches Seminar) に入った。すでにその前年ライプツヒ大学に教育学の選科生として登録し、哲学やドイツ学 (Germanistik) の講義も聴講していた。チラーのこのゼミナールにはすでに1871年からシュトリュンペル (Strümpell) も参加し、それはあたかもヘルバルト派のセンターの様相を呈していた。チラーのゼミナールでのケールバッハの主要な教育研究のテーマは、アーサー王の伝説、円卓の騎士の愛と勇気の物語の教材化の問題で、これについてはいくつかのレポートなどの記録が残されている。このライプツヒの教育学ゼミナールには実験学級が付設されていたから、ケールバッハはそこでの授業も担当したことだろう。さらに、後にそれによって学位を得ることになる中世のドイツやフランスでの伝承の世界に関心を傾斜させていったことははっきりとしているが、しかしながら、それ以上の詳しいことについてはほとんどわかっていない。ただ、その動機として、ビスマルクの第二帝政ドイツの到来によって、ローマからの訣別、ケルト民族も含んだ大ゲルマンへの一般的な回帰と憧憬が本格的に求められることとなったということはたしかだった。ケーニヒスベルクのヘルバルトに端を発する教育学ゼミナールの系譜においては古代や中世の伝説や伝承が主要な教材となっていたことからすると、それはごく当然の選択だったのかもしれない。そもそも、ヘルバルトの教育学にとっては、『一般教育学』(1806年) 以来、勇気、友情、さらには誠実といった永遠な有徳の世界を提供する古代ギリシアの神話、ことに「オデュッセイ」などのホーマーの文学が格別の意味をもっていたからだ。ケールバッハにとってのひとつの転機は、道徳の宗教に対する関係に関する懸賞問題でカントを取り上げたことで、それが彼の関心を形而上学の問題へと移行させ、やがてその文献考証、そしてその編集の面白さへと繋げていった。レクラム文庫の学生版カント選集は、1877年に『純粹理性批判』の刊行で、ベンノ・エルドマン (Erdmann) との小競り合いが生じはしたものの、そのことによってか、彼の教育

書編集者としての名はかえって広まったといってもよい。1876年にライプツヒを去ったケールバッハのその後の活動は、チューリンゲン各地の学校での教師生活、さらにハレ大学の大学図書館司書などを経て、1883年からは終の栖となったベルリンのシャルロッテンブルクに落ち着く。1885年には、ベルリン大学のW. シェーラー (Scherer) のもとで、「アーサー王伝説に関するウェルシュ、古フランス、中高ドイツの記念碑の様式表現について」の研究で博士の学位を得て、1894年にはベルリンで教授に推挙された。アーサー王の伝説については、チラーのゼミナールでの実践でこれが教材化の主要な内容問題となっていたことは、すでに触れた。

少しばかり先を急ぎすぎたかもしれない。ケールバッハがヘルバルト全集の実際の編纂作業に取りかかったのは、ライプツヒを去った直後の1877年以降のことである。ヘルバルトがカントの実質的な後任として、ロシアに近い東プロイセンのケーニヒスベルクの大学へと赴いた翌年の1810年から経営し始めた「教授学練習所」(「教育学ゼミナール」への改組は1818年)、それを源流とするライプツヒのチラーのゼミナールに参加していたケールバッハがヘルバルトに関心をもったとしても、そのこと自体何ら不思議なことではない。ケールバッハがそれまでの定版だったハルテンシュタイン (1850年以降) やヴィルマン (1873年以降) といった教授たちの編集する選集への不満からヘルバルト全集の編纂に着手したのは早くとも1877年以降のことだが、ヘルバルト他界の翌年 (1842年) に旧友シュミット (ゲッチェンゲンに私講師として赴くまで寄寓していた北ドイツの大都市ブレーメンの名望家) によって書かれた「回想」を冒頭に収めた第1巻、そして有名な『一般教育学』を収める第2巻の刊行はその10年後の1887年、ライプツヒから遠く西へ離れたランゲンザルツァ (Langensalza) の書肆ヘルマン・バイヤー (Hermann Beyer) からだった。彼自身の手になる最終 (第10) 巻の刊行に漕ぎ着けたのは編纂に乗り出してから実に25年後の1902年のことで、それには、ヘルバルトの1831年から1836年にかけての論攷、ことに有名な『教育学講義綱要』の1835年の初版と1841年のヘルバルト没年の版、それに『自然法と道徳の分析的解明』などが収載されている。もちろん、これまでに出版された各巻にも、それまでの諸版では見落とされてきたいくつもの重要な論攷が収められている。しかしなが

ら、ヘルバルトがケーニヒスベルクで行った教育活動、つまり地方教育評議会、さらには大学の（とはいっても、その経費のほとんどはヘルバルト自身の負担だったのだが）教育学ゼミナールの活動についての文書、そして何よりも書簡の類の整理は、著作の最終（第11）巻の刊行（1906年）とともに協力者オットー・フリューゲル（Flügel）らの手に委ねられなければならなかった。その前（1905）年の秋には、ケールバッハはすでに世を去っていたからである。ケールバッハ自身は第1巻の編集者序言（1887年）で、書評や書簡、さらには行政文書まで収録するとの計画を披露している。牧師だったフリューゲルは、「ヘルバルトの最良の理解者」などと呼ばれている。彼によって編集が継続された書評や書簡、そして行政文書まで収録（8巻分）されたヘルバルト全集（全19巻）の完結は1912年だった。なお、ケールバッハは、ヘルバルトの教育学ゼミナールについては格別の関心をもっていたと思われ、すでに1893年の秋にウィーンで開催された第42回ギュムナジウム教師会議でそれについての講演を行っている。これはただちに活字にされているので、そこからは今日でも教育ゼミナール経営者としてのヘルバルトへの彼の並々ならぬ関心が見て取れ、またその描写においては周到に資料的な吟味を加えられていることを窺い知ることができる。

一方、MGPの編纂については、ライプチヒの教育学ゼミナールのパトロンでもあったトマス・シューレ（Thomasschule 大作曲家バッハで有名な聖トマス教会に付設されていた当時のエリート校）の校長フリードリヒ・アウクスト・エックシュタイン（Eckstein）、彼は、前節で触れたシュミットの『教育制度百科事典』（本稿の2.参照）の第4巻でラテン語教授の変遷についての項目を、その小さな活字からしても本来ならばゆうに一冊以上の書物となる200ページにわたって担当しているが、そのエックシュタインが個人的に収集していた教育の膨大な史料を所蔵していることはよく知られていた。教育史の史料の系統的な収集の必要性は1871年11月16日ライプチヒの教員組合のコメニウス没後200年記念の集会でユリウス・ベージャー（Beeger）が提案して以来、ことにライプチヒでは教育史の中央資料館を設立しようという動きが活発となっていた。後にMGPに貴重な史料群を提供し、その紹介者ともなるブラウンシュヴァイクの実科ギュムナジウムの校長フリートリッヒ・コルデヴァイ（Koldewey）の1878年の東部ドイツのゲ

ラでのギムナジウム教師会議における熱心な史料整理の必要性についての提案は、そのベーカーに触発されてのことだったし、そこではエックシュタインの『教育制度事典』への掲載論攷が「原史料の周到な吟味に基づいて書かれている偉大な業績だ」との讃辞も表明されていた。コルデヴァイの提案は、1879年の西部ドイツのトリア（Trier）でのギムナジウム教師会議においてエックシュタインの賛意を受け、そのような経緯はいくつかの曲折を経て、ケールバッハが戻る1884年の末までにはライプチヒにコメニウスの名を冠した教育資料館の設立として結実することになる。そのまえに、つまり少なくともその1884年、つまりこれより100年まえに汎愛学院が誕生したデッサウでのギムナジウム教師会議までにケールバッハがMGPの構想をもってベルリンに出向き、そこでホフマンという出版者と出会って援助の約束を取り付けていることがわかっている。ケールバッハは、この年には、すでに「MGPの簡明な計画」を公表している。エックシュタインは、自らの出席が最後となったその会議で「Monumenta Germaniae Historicaの誇り高き響きを彷彿とさせるものだ」としてMGPの構想を賞賛している。Monumenta Germaniae Historicaは、ウィーン会議の直後、プロイセン改革の立役者フォン・シュタイン（v. Stein）男爵によって提唱され、その刊行が企画され、1826年にその第1巻が刊行されたドイツ中世史料の集大成のことで、19世紀の末になってもその事業は継続していた。ケールバッハがこれ以降も相当の時間をかけてMGPの構想を練り直していたことは、すでに第1巻の刊行をみている1887年の秋スイスのチューリヒで開かれたギムナジウム教師会議で「MGPの総合的な計画について」と題する講演を行っていることにも示されている。

1886年にコルデヴァイの編集によるその第1巻『1251年から1828年までのブラウンシュヴァイク市学校規程』がベルリンの書肆ホフマン（Hofmann）から刊行された。これは、コルデヴァイによる自身の当地の学校規程の収集と整理の成果だった。MGPは、その後、ケールバッハが世を去る1905年末までに計33巻が送り出され、最終的には大戦前夜の1938年までに全62巻の刊行をみた。そのなかには、彼の生前にはパハトラ（Pachtler）によるイエズス会の教育規程（Ratio Studiorum et Institutiones Scholasticae Societatis Jesu）の羅独対訳（第5、9、16巻）やハイデルベルクのギムナジウム校長であるハルトフェルダー（Hartfelder）

によるメランヒトンについての今日期待できる唯一の体系的な研究（第7巻）、また17世紀末からのドイツにおけるコメニウス教育学の移入や影響を扱ったチェコ出身のグヴァチャラ（Kvacara）による資料紹介とその分析（第26、32巻）、さらにはポータン（Poten）によるドイツ語圏諸邦の軍隊教育（Militärerziehung）史（第10、15、17、18巻）などが刊行されているが、企画者で全体の編集者でもある彼が担当している巻はもちろんひとつもない。完全に裏方に徹して、表面には出ようとはしなかったのだろう。ケールバッハの没後には、高等学務委員会（Oberschulkollegium）を舞台とする18世紀末のプロイセン中等教育政策の展開と大学入学試験の導入を扱ったシュヴァルツ（Schwartz）の論攷（第46、48、50巻）やフリードリヒ2世（大王）の教育政策をまとめたフォルマー（Vollmer）の力作（第56巻、彼には別に大王の父フリードリヒ・ヴィルヘルム1世の教育政策を扱った著作もある）なども刊行されている。最終の第62巻は、ティーレ（Thiele）の「プロイセン教育制度史」だった。彼はフンボルト（W.v.）の片腕であるジュフェルン（Süvern）の「教育法案」（1819年）の最初の全文紹介者として知られる。MGP各巻の担当者の多くがギムナジウムの教師だったことは、このさい注目しておいてよい。MGPの刊行開始からしばらく経った1890年、プロイセンでは「学校会議」が開催され、皇帝ヴィルヘルム2世の愛国心高揚の開会演説が教育界を酔わせていたが、ケールバッハは、その1890年に「ドイツ教育史協会」（Gesellschaft für deutsche Erziehungs-und Schulgeschichte）を設立し、「協会」の会則では、その目的を「教育史の体系的かつ多面的な研究を、ドイツ語圏を中心とした教育史・学校史（大学史を含む）に関する文書館や図書館所蔵資料の完璧な収集、批判的な検証、そして学術的な出版によって遂行する」とし、そのうちの出版については当面MGPの刊行と「会報」（Mitteilungen）をこれにあてるとしている。「協会」の参与会（Kuratorium）には、ケールバッハの交友の幅広さを示すかのように、彼の居住地ベルリンの教授ハルナック（Harnack）やディルタイ（Dilthey）らの斯界の大物をはじめ、ライン（イエナ）、ヴィルマン（Willmann プラハ）、ヴィンデルバント（Windelband シュトラスブルク）、チーグラウ（Ziegler シュトラスブルク）などの各地の大学教授やハルトフェルダー（ハイデルベルク）、コルデヴァイ（ブラウンシュヴァイク）やザルヴェルク（v. Sallwürk カールスルーエ）など

のギュムナジウムの校長ないしは教育行政関係者、さらにはチューリヒのペスタロッチ研究所（Pestalozzianum）の所長フンチカー（Hunziker）や中世大学史の研究者としても知られているローマ教皇庁文書官のデニフレ（Denifle）なども、これに名を連ねている。その「会報」は、「協会」設立の翌年から発行されている。「会報」は、彼が他界してから5年後の1910年には教育史の「雑誌」（Zeitschrift）と改称して、その刊行はMGPとおなじ1938年まで継続した。この両者には教育史の史料考証にまつわる多くの興味ある論攷や記事が掲載されているが、1905年末刊行の「会報」の第15巻第4号には、この直前の10月21日にベルリンのシャルロテンブルクで世を去ったその創刊者の写真（それに添えられたサインには、Prof. Dr. とあることから、1894年以降のものだと判断される）、そして追悼と回想の記事が掲載されている。

（付 記）

シュミットとケールバッハの部分については、それぞれ筑波大学附属図書館の館報『つくばね』のVol. 30 No. 1（2004. 6）に「ある教育事典編集者のこと」として、および同報のVol. 28 No. 1（2002. 6）に「脇道に逸れる愉しみ～ある教育書編集者のこと～」として掲載してもらったものを同館の許可を得て全体を大幅に補正のうえ、またラウマーの部分については、筑波大学教育学系「ペスタロッチ祭」での講演（最終講義）「ペスタロッチ、教育史、そして雑言少々」（2007. 3. 13開催予定）の準備原稿中の一部をこれも増補のうえ前もって、それぞれ転載させてもらった。商売を越えて資料の収集に協力してくれた武智珠美彦氏も含め、関係各位の厚意にあらためて感謝したい。